

バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No.83



2019 年 8 月

NPO 法人 日本バスケットボール振興会

目 次

- シニア交歓大会 in YOYOGI (第12回) 開催 普及部 . . . 2
- 第12回シニアバスケットボール交歓大会を終えて 渡辺 誠 . . . 10
健康寿命を延ばす能力に合ったスポーツを続けよう
- 「AKATSUKI FIVE」8月の国際試合 11
日本代表の強化試合に応援を！
- 日本體育大学1回生の回顧録 歴史部 . . . 13
稲垣安二氏のバスケットボール
- バスケットボール普及の立役者 普及部 . . . 18
東京都豊島区で尽力の宗田昭弘氏
- 中学生初心者向けクリニック 総務部・普及部 . . . 22
京都市と世田谷区で開催
- シニアチーム紹介 駄馬 普及部 . . . 25
- 人物抄 油井 康さん 29
- 会員だより
21世紀はダブル活躍の世紀 島本 和彦 . . . 32
アジアのバスケット好きな仲間たち 鈴木 承二 . . . 34
その4：第15回アジアカップ バンコック大会
- モルテンNEWボール 36
新品でも滑りにくい性能
- 訃報・追悼文 37
- 事務局だより 40
- プラザ こぼればなし 41

シニア交歓大会 in YOYOGI (第12回) 開催

[普及部]

12回目を迎えた「シニアバスケットボール交歓大会 in YOYOGI」は、7月4日(木)～7月5日(金)の2日間にわたって国立オリンピック記念青少年総合センター体育館で開催された。

今回も、代々木第二体育館改修工事中という事情から、上記体育館での開催となったが、男子8チーム、女子4チームが参加し、総参加者数が200名を超える盛況ぶりであった。

遠距離の岩手、兵庫、長野からも多くのシニアが参加し、白熱した試合を展開。男子70歳以上の部、女子60歳以上の部でも元気なプレーが続出し、高齢でもバスケットボールを生涯スポーツとして楽しむ姿が印象的だった。

試合時間は、男女とも8分クォーター、70歳以上6分クォーター、女子の60歳以上6分クォーターとしたが、それぞれのバスケットを十二分に味わっていただいた。

主催した振興会では、各チームに振興会会員3名以上の在籍を参加条件としたが、全チームが条件をクリアしての出場となり、振興会会員の増加にも一役買った形となった。

第1日目の試合終了後に、会場近くの代々木倶楽部で開催された合同懇親会には、80名以上のシニアが出席し、各チームの紹介を含めた交流はこれまで以上に盛り上がり意義のある大会となった。

[試合の結果]

7月4日(木)

	チーム名		チーム名
男子	埼玉・Gsブルーウィンズ	30 - 50	駄馬
男子	横浜ビー・シーガルズ	40 - 24	千葉Coki-Coki
60UP女子	シルバーキッズレディーズ・入間テンダース	12 - 24	千葉
男子	岩手マスターズ	11 - 36	埼玉・Gsブルーウィンズ
男子	シルバーキッズ	29 - 32	STARS OF STARS
60UP女子	千葉	31 - 12	シルバーキッズレディーズ・入間テンダース

7月5日(金)

	チーム名		チーム名
男子	千葉Coki-Coki	29 - 44	シルバーキッズ
男子	岩手マスターズ	23 - 14	セブンブラザーズ
70UP男子	STARS OF STARS混合	20 - 15	セブンブラザーズ・駄馬
60UP女子	A (シルバーキッズ)	20 - 14	B (その他混合)
女子	入間テンダース	31 - 31	長野クラブシニア
70UP男子	岩手マスターズ・横浜ビー・シーガルズ	12 - 22	シルバーキッズ・千葉Coki-Coki
男子	セブンブラザーズ	15 - 17	横浜ビー・シーガルズ
女子	長野クラブシニア	32 - 22	入間テンダース
男子	STARS OF STARS	48 - 25	駄馬

主催者の振興会では、参加各チームに感想文提出のお願いをしたところ、以下のような感想文が寄せられたので、チーム写真とともに紹介する。(掲載順はプログラムによる)

STARS OF STARS



STARS OF STARS 70UP 混合



シニア交歓大会 in YOYOGI に参加して

奥山 基子

主人が SATRS OF STARS (S O S) に登録し、参加しているのがご縁で、70UP 混合チームで大会に参加させていただきました。

最初は、S O S の鹿子木さんの得点でリードしたと思いきや、逆転され、必死に挽回、またリードする。

女性にも容赦ない男性のディフェンス、女性も負けまい！とハッスルする。奥田さん・松下さんのファイト溢れるシュートで得点を重ね、ラストに篠原さんのシュートが決まって

大勝利！両チーム共に称え合い、交歓大会にふさわしい、勇姿と笑顔の試合になりました。

初めてバスケットボールを手にした頃、シニア世代になっても、ユニフォームを着る姿を想像したことがあったでしょうか？ 今も変わらず情熱を持ち続け、ボールを追う姿は感動にあふれています。学生時代には簡単にできたことが、今は必死に頑張らないと出来ないことも多々あります。それだけに、シュートが決まった喜び、パスカットした嬉しさは、格別です。

また、練習後のミーティング、大会後の祝賀会も、有意義な楽しい時間となっています。60歳代の若いプレーヤーから刺激をもらい、若手はベテランから戦術を学ぶ。お互いが励まし合い、増々闘志が沸く。練習の成果が、この大会のコートで輝くことは、日頃の励みにもなり、他のチームとの交流も深まり、素晴らしいことだと思います。

1964年の東京オリンピックに出場した諸山さんと、共にコートに立てる幸せを感じながら、「2020年東京オリンピック」の年にも、一緒にコートに立ちたいと思い、早くも来年の試合を楽しみにしています。

私は、還暦目前に、初めてレフェリーにチャレンジしました。SOSには、レフェリーのスペシャリストの小澤さんがおられます。まだまだ未熟で僭越ですが、尊敬する小澤さんと共に笛を鳴らして、アドバイスを頂けることは、とても光栄なことと感謝しています。もっと勉強して経験を重ね、皆様が快く大会に望めるように、努力したいと思います。

年を重ねたからこそ、できるチャレンジ、仲間との親睦、悔しい思いも楽しみに変わる。いつも初心に帰り、学生時代と同じ気持ちで、シニアも青春真っ只中。生涯現役！！を目指して、頑張りましょう！新たな幕開けとなる令和元年に、シニア交歓大会に参加できたことを、とても嬉しく思います。決まった1本のカットイン。「次回は2本決めたいな！！」

この大会が益々発展し、盛会になることを願い、来年皆様にお会いできるのを楽しみにしています。

最後になりましたが、大会を開催・運営してくださいましたスタッフの方々、ありがとうございました。

埼玉・Gsブルーウィンズ



岩井 厚一

バスケットボールに再び取り組み始めたのは2014年夏、73歳のときです。年寄りがバスケットの練習をしていると聞いて、川越の中学校の体育館に見学に行き、少し練習をさせてもらいました。実に45年ぶりの練習でした。

このチームは60歳以上のゴールデンシニアクラスで、東松山に本拠を置き週2回東松山と川越で練習しているとのことでした。しばらく川越の練習に参加させてもらったのですが、何分にも高齢で半世紀近くバスケットから離れていたもので、チームのお荷物になるのは必定、しかし学校、職場でも荷物になりながらもしがみついて生きてきたので、いつものこと、少し位のことではへこたれることはありませんでした。そのうえチームの皆さんに支えられて楽しく5年間を過ごしました。

自己PRはそのくらいにして、私が交歓大会 in YOYOGI に初めて参加したのは2017年第10回大会です。体育館で皆さんのプレーを見ると元気で潑潑としており、真剣さの中にも和気あいあいとしていて、スピードにこそ欠けるものの往年の姿を垣間見ることができました。

「好きこそものの・・・」とありますが、全国から集まったプレーヤーの皆様からはそれを通り越したバスケットに対する愛情を感じることができ、いい年をしたバスケット馬鹿の私には、それがとても誇りに感じられました。

またこのときに驚きの出会いがありました。高校時代青春をかけてバスケットを共にしたチームメイトの弟さんに50年ぶりに出会ったのです。その方は振興会理事長の渡辺誠さんです。かねてからチームメイトの訃報には接していたのですが連絡が取れず心配をしていました。

弟さんから亡くなられた時の様子や残されたご家族の方々の様子を聞いて、何よりもご家族の皆さんが元気で生活されているとのこと、大変安心いたしました。

今回の大会はチーム事情もあり、初日（4日）のみの参加となり、ダブルヘッダーということでスタミナが心配でしたが、最初の試合は敗戦となりましたが1試合目がウォーミングアップの役目を果たしたようで調子が上がり、2試合目は勝利に結びつきました。

私に関して言えば相変わらずチームのお荷物になり、貢献することができませんでした。が、それなりに楽しませていただきました。

今年の登録メンバー表を見て70歳代の人が多いということに驚かされました。人生100歳時代を反映しているのでしょうか、70歳以上のプラチナ・シニアの大会が求められるようになったのではないのでしょうか。

これからは、各チーム60代、70代の2チーム編成で試合に臨むことが現実味を帯びてきたようです。

また、八村選手や渡辺選手のようにNBAで活躍する選手も現われ、多くの人がバスケットボールに注目していますが、若いときだけでなく年をとってもできる生涯スポーツであると、私たちが実証していければよいと思っています。

なお、見出しは80歳までプレーヤーでポジションはベンチ（B）でも大会に参加したいと思って書きました。

最後に俳句でも川柳でもないのですが、五七五を書いてみます。

バスケット 好きで集いし 爺婆かな
ナイスショット 味方のリングと 思いしに

セブンブラザーズ



シニア交歓大会 in YOYOGI に参加して

山内 豊

今年もまたその時期がやってきた。小生にとって夏の始まりの最大難関?! イベントである「シニアバスケットボール交歓大会」である。

我がチーム「セブン・ブラザーズ」は、その名のセブンが示すように旧7帝大出身のOBで構成されている。全員集まっの練習はおろかチームとしてのオブリゲーションは何も無く、ただ当日の試合に参加すればOKと実に気楽なチームである。

メンバーの中には、大学卒業後もそれなりにバスケに係っているか、あるいは別のチームでプレイを続けている者もいるため、これまでは予想以上の成績を収めていた。しかし今年はポイントgetterの一人を怪我で欠き、参加人数も10名とこれまでで最も少ない上に、1日2試合ですぐに主力メンバーの疲労度が重なり、2試合とも接戦ではあったが敗退と残念な結果に終わった。

小生はこのチームに参加して4年になる。大学卒業後社会人時代はバスケを行う機会は全く無かったが、退職後にヒョんな巡り合いから当チームの存在を知り、今更バスケなど無謀との周囲の冷ややかな批判をよそに再開することになり、今年で72歳になる。

今回はじめて70歳台の試合に混合チームの一員として出場したが、またもやその元気なプレイに圧倒された。実は4年前再開後の初めてのゲームでも、廻りの60歳台のプレイヤーの動きの素早さに完全に圧倒され、これは何とかせねばと昔の負けん気が顔を出し、その後トレーニングに励んだ結果、チームの戦力にはならないまでもプレイには付いて行けるようになった。しかし70歳を超え、もう限界だと自分勝手の納得感からトレーニングも疎かになった状態で、今回の大会に臨んだ。そこで70歳台の元気・澁漉としたプレイぶりを再度体験、来年はこのスピードについていけるようまた頑張ろうかな?! と新たな気持ちになった次第である。

試合後は当然最も楽しみにしている懇親会である。試合よりこの懇親会目当てで参加しているというのが、小生の正直な気持ちである。今年は懇親会の場所が良かったことに加え、試合には仕事等の都合で参加できなくとも懇親会だけはこの熱心?! なメンバーも多数集まり、

これまでになく盛り上がった非常に楽しいひと時となった。

因みに、旧 7 帝大では、毎年夏、5 日間程度かけて 7 大学総当り制定期戦を行っている。場所は各大学の持ち廻りのため、開催地の大学以外はチーム全員が旅館（現在はホテル？）に同宿となる。従って昼間の試合はさて置き、夜の過ごし方はまた別の大きな楽しみとなる。そんな中で我々の時代、大会修了後の懇親会の席では恒例の各大学対抗余興合戦があったのであるが、試合後宿舎においてその余興の特訓に精を出すユニークなチームもあった。まあそんな当時の逸話も語り合える楽しい懇親会であるが、全てはこのバスケットボール交歓大会があるお陰と改めて振興会関係者の皆さまに感謝するところである。

「セブン・ブラザーズ」の当面の課題は、60 歳台の若いメンバーの発掘と補強である。それともう少し先になるかも知れないが、50 歳以上の女子 OG で構成する「セブン・シスターズ」の立上げである。団塊世代の OB の一人として少しでも協力できればと思っている。

最後にこの大会場所であるが、東京オリ・パラ 2020 後は、可能な限り早く代々木第 2 体育館に戻して頂きたい。何といても我々世代にとっては学生時代からのバスケットボールのメッカなのだから。

入間テンダース



第 12 回シニア交歓大会 in Yoyogi に参加して

石原 明美

バスケットボールの聖地代々木第二体育館が改修工事中で使用できないため、今年も青少年オリンピックセンター体育室を使用してのゴールデンシニア大会のご案内を 4 月に振興会から頂きました。チームに声がけて参加者を募りましたが、平日 2 日間に渡る開催は仕事を持っているメンバーが多い我がチームとしては参加者を確保することが簡単ではなく、1 日目のみの参加者と 2 日目のみ参加者それぞれが 5 人程度でした。そのため単独では試合にならないので千葉の方や振興会所属の方に助っ人をお願いして何とかエントリー

一しました。振興会の役員の方にはお骨折りいただき、ありがとうございました。

参加申込後、50歳オーバーのチームの参加が2チームで長野県チームは2日目のみ参加で2ゲーム希望、1日目は60歳オーバーで兵庫シルバーキッズさんと千葉のみですとの連絡がきました。

入間テンダースは1日目に参加できる60歳オーバーは4名だけでしたので、第1試合はシルバーキッズさんに入れて頂き vs 千葉と、第2試合は千葉に入れて頂き vs シルバーキッズさんと試合させて頂きました。

2日目は50歳オーバーで参加できる者が3名と60歳オーバーが2名で、1日目ならば参加できた50歳オーバーの者は結局ギリギリになってからでは仕事の調整ができず今回は不参加になり、非常に残念でした。



2日目の長野県チームとの50歳オーバーの2試合では、入間テンダースは千葉から7人の助っ人に来て頂き、振興会のスミちゃんにも助けて頂きなんとか試合になりました。

また、2日目は長野の試合の前にBコートで60歳オーバーのミックスの試合 vs シルバーキッズさんにも千葉の方、神奈川の方、長野の方とご一緒にチームを組んで兵庫のシルバーキッズさんと試合やらせて頂きました。2日間で5試合も試合でかなりハードでした。

もう一つのメインイベントである1日目夕方からの懇親会では、会場スクリーンに振興会秘蔵のビデオが終始上映されていました。戦後間もない全日本選手権大会の映像、1964年の東京五輪の映像、笠原成元先生のクリニック映像など見た事の無い画像ばかりでした。

各チームの自己紹介と歌の出し物は、恒例のシルバーキッズさんの六甲おろしの替え歌で締めとなりました。今年もたくさんの再会と新しい出会いがありました。いきなり振られた入間テンダースの出し物は即席でザピーナツの恋のフーガを姉と歌いました。こんな事ならちゃんと仕込んでくるんだった。



最後に体育館を借りてくださり、大会運営にご尽力くださいましたバスケットボール振興会の皆様に感謝申し上げます。

恒例の全体懇親会

大会第一日目の試合終了後、代々木倶楽部で開催された懇親会には80名以上の方々が参加し、各チームの紹介や地元の歌の披露などで盛り上がった。

そして、試合で敵味方だったシニアの選手たちが、いつのまにか仲良くなってお互いに肩を抱き合う姿が印象的だった。

これぞ成熟したシニア交歓大会かも知れない。



大野会長



岩手の民謡



第12回シニアバスケットボール交歓大会を終えて

健康寿命を延ばす能力に合ったスポーツを続けよう

渡辺 誠

第11回（2018年）と第12回（2019年）の大会は、会場を「国立代々木青少年スポーツセンター」を使用して開催しました。従来、使用していた代々木第二体育館が耐震工事のために使用することができないことによるものです。

2020年には、代々木第二体育館を使用する予定ですが、オリンピックのかんけいで11月以降でないと使用できないとのことです。従って、予約などが明確になり次第、皆さんにお知らせしたいと考えています。

今回は、バスケットボールの活動団体である「アクティブフープ」様にシニア大会の運営に協力していただきました。体育館の予約に始まり、事前の打ち合わせなどの事務手続き、会場設営、試合用具の手配、審判手配などの多くの協力をお願いし、その結果、大会の進行がスムーズに進み、効率的運営ができました。（「アクティブフープ」は、社会人のための大会、初心者向けのスクール、ジュニア向け（10才～14才）のスクールなどの運営などの活動を行っています）また、平日の開催にも拘わらず多くのチームに参加していただき、感謝申し上げます。

初めての試みとして懇親会の会場で、振興会が所蔵している映像を参加の皆さんに内容の説明しながら紹介しました。

- ① 昭和11年関東大学リーグ東京商大対慶応義塾大学の試合風景
- ② 「1964 東京オリンピックの技術映像」
- ③ 「吉井四郎氏」のフィルム などです。

今後も機会があれば振興会が所蔵している映像、資料などを皆さんにご紹介したいと考えています。

シニアバスケットボールは能力に合ったスポーツを続けることです。

厚生労働省では「健康意識の高まりや生活改善の結果が日本人の平均寿命を更新している。医療水準の向上などで、今後も伸びる可能性は十分ある」と述べています。また「平均寿命」だけでなく「健康寿命」をいかに長くするか、このためにも「自分の能力にあったスポーツを続ける」ことが「健康寿命を」延ばすことにつながると語られています。

一般論としても、「健康寿命」を延ばすために能力にあったスポーツを日常的に続けることが推奨されています。身体を動かすことも必要ですが、適正な能力を知ること大切。中高年の運動は、全身性、持久性に加えて有酸素の運動で個人か数人ででき、運動強度のあまり高くないものが適しています。50～70歳の方は体力的に少し苦しい程度が良く、無理をせず止める勇気も大切、瞬間的に筋力を使うスポーツを避け、勝敗成績にあまりこだわらないで自信過剰に注意して健康状態の悪い時は止める。健康寿命を延ばすには能力に合ったスポーツを続けることが必要ですが、止める勇気も必要です。

シニアバスケットボール交歓大会は、振興会の活動の大切な事業ですので、これからも新しい企画を織り込み、更に皆さんにとって楽しく満足のいく大会にしたいと考えています。
[理事長]

「AKATSUKI FIVE」 8 月の国際試合

日本代表の強化試合に応援を！

[編集部]

東京都では、「バスケットボール競技の東京 2020 オリンピックテストイベントとして、来る 8 月下旬にさいたまスーパーアリーナでバスケットボール日本代表国際大会 2019（仮称）を日本協会主催で実施する」と発表していた。

日本協会はそれを受け、下記国際ゲームを開催することを 6 月 25 日に発表したの、ゲーム日程と関連情報をお知らせする。

日本協会は、開催発表の際、『これらの国際試合により、FIBA ワールドカップ 2019、東京 2020 オリンピック、FIBA ワールドカップ 2023、パリ 2024 オリンピックなどを見据えた新時代の幕開けとして、選手の活躍はもちろんのこと、すべてのバスケットボールファン、そしてすべての日本の皆さんが「一丸」となって盛り上がる「熱狂」の夏、「夢中」になる瞬間をお届けしていきたい』とコメントしている。

「AKATSUKI FIVE」男子日本代表

男子日本代表の国際試合は、8 月 31 日から中国で開催されるワールドカップの前哨戦として、他の予選グループで出場したチームを招聘しているので、注目したい。

・「バスケットボール日本代表国際試合 International Basketball Games 2019」

男子日本代表は、ワールドカップアジア地区予選グループ F 2 位、FIBA 世界ランク 48 位である。（FIBA 男子世界ランキングは 2019 年 2 月 26 日現在）

第 1 戦：8 月 12 日（月・祝）（17:00 開始予定）・千葉ポートアリーナ

VS ニュージーランド代表（アジア地区予選グループ E 1 位・世界ランク 38 位）

第 2 戦：8 月 22 日（木）（19:00 開始予定）・さいたまスーパーアリーナ

VS アルゼンチン代表（アメリカ地区予選グループ E 2 位・世界ランク 5 位）

第 3 戦：8 月 24 日（土）（15:00 開始予定）・さいたまスーパーアリーナ

VS ドイツ代表（ヨーロッパ地区グループ L 2 位・世界ランク 22 位）

第 4 戦：8 月 25 日（日）（15:00 開始予定）・さいたまスーパーアリーナ

VS チュニジア代表（アフリカ地区予選グループ E 1 位・世界ランク 51 位）

頭書に言及のオリンピックテストイベントは、上記第 2 戦から第 4 戦までが相当する。

・「International Basketball Warm-up Game 2019」

男子日本代表は、さいたまスーパーアリーナにおけるテストイベントの前に、ウォームアップゲームを下記により開催する。

8 月 14 日（水）（19:00 開始予定）・カルッツかわさき VS ニュージーランド代表

・男子日本代表選手

日本協会は、7月30日、日本代表候補選手16名を発表し、強化合宿により最終出場メンバー12名が決められる。

招集メンバーには、現地時間7月5日から15日まで開催のNBAサマーリーグへの参加メンバー、八村塁（ウィザーズ）、渡辺雄太（グリズリーズ）、比江島慎（ペリカンズ）、馬場雄大（マーベリックス）の各選手が含まれ、彼らの活躍が期待される。

八村、渡辺選手はNBAの規則により、日本代表活動が最大で年28日間と定められているが、男子日本代表フリオ・ラマス監督はこの期間を最大に生かすという。

「AKATSUKI FIVE」女子日本代表

女子日本代表（アジア大会優勝、ワールドカップ9位、世界ランク10位）は国際強化試合 2019 三井不動産カップ（水戸大会）で5月・6月にベルギー（ワールドカップ4位、世界ランク16位）と対戦し、91－75、84－71と連勝している。

（FIBA 女子世界ランキングは2018年10月1日現在）

・「バスケットボール日本代表国際試合 International Basketball Games 2019」

・「バスケットボール女子日本代表国際試合 三井不動産カップ 2019」

女子日本代表（アジア大会優勝、FIBA世界ランク10位）が、頭書のオリンピックテストイベントとして、チャイニーズ・タイペイ（世界ランク39位）と、上記男子日本代表の第3戦・第4戦それぞれに続き対戦する。

第1戦：8月24日（土）（18:30 開始予定）・さいたまスーパーアリーナ

VS チャイニーズ・タイペイ

第2戦：8月25日（日）（18:30 開始予定）・さいたまスーパーアリーナ

VS チャイニーズ・タイペイ

・女子日本代表選手

上記日程に基づき、日本協会は、今夏開催予定の「FIBA 女子アジアカップ 2019」（場所と日程は未定）の4連覇、ならびに来年に迫った「東京 2020 オリンピック競技大会」へ向けた強化活動の一環として、2019年度女子日本代表チームの第5次・第6次強化合宿を、味の素ナショナルトレーニングセンターにおいて7月1日から19日まで実施した。

メンバーは、高田真希選手、渡嘉敷来夢選手をはじめとする17名（平均身長178.5cm、平均年齢24.2歳）で、20歳の若手4名が招集されている。中心は24歳のベルギー戦で3ポイントシュート、第1戦8本中5本、第2戦9本中5本を決めてMVPに輝いたJX-Eneosの林咲希選手であろうか。渡嘉敷選手も足首の怪我なども回復してこの合宿に合流し「東京オリンピックまでは日本代表でチームを引っ張る」と力強く語っている。

彼女らの活躍を期待したい。

日本體育大学 1 回生の回顧録

稲垣安二氏のバスケットボール

[歴史部]

日本體育大学（以後、日体大）に 1 回生として入学し、卒業後に日体大のバスケットボールを指導して日本のトップチームに育て上げた稲垣安二氏が、昭和 20 年代から平成初期までにおけるご自身の経歴とバスケットへの思いを記事に纏めているので、ここに紹介する。

稲垣安二氏は、日体大の学長から、日本大学連盟、日本協会などでの役員を務められ、日体大の教え子が全国に拡散して日本のバスケットの普及に大役を果たした。その後、当振興会に参加して多数の当会会員を勧誘し、振興会の隆盛に貢献している。

振興会副会長時代に体調を崩されて当会を退会され、現在療養に励まれている。

下記手記は、当振興会副会長時代（平成 17 年）に執筆されたものである。

稲垣 安二

1、バスケットボールの初めての出会い



昭和 22 年 1 月、旧制中学 4 年生の私は、体育教員の元森 茂氏よりバスケットボール（当時は籠球と呼称）部の復活を依頼され、同級生の田坂良昭君他 2 人と協力し、下級生 10 余名を集め、旧剣道場につくられたコートで練習を始めた。然し、校内には籠球の指導のできる教職員もいないので、主将の私は同級生や下級生の協力を得ながら、籠球部の先輩を探し、時々技術の指導を受けた。

私のバスケットボールの初めての出会いは旧制中学で同級生と協力し籠球部を復活させたことであった。

2、学生時代のバスケットボール

昭和 24 年、学制改革により旧制高校、専門学校等が大学に昇格した。今日の日体大もその 1 つであり、私は同大学へ 1 回生として入学することになった。

戦後逸早く復活した関東大学バスケットボール連盟（関東大学連盟と略称）に、新たに大学に昇格したバスケットボールの関係者が昭和 25 年、関東大学バスケットボール新連盟を結成した。それにより関東地区には関東大学という名称の学連が 2 つ存在することになり、前者を旧連盟、後者を新連盟と略称していた。日体大は新連盟に所属し 1 部にランクされた。

私は大学 2 年生の 5 月、練習中に右脚アキレス腱を切断し、その年はリハビリと自主練習に努め、3 年生に進級し主将として復帰したが、在学中の成績は 1 部 6 チームの中位で優れた成績を残せなかった。

当時の学生バスケットボール界は、慶大、立教大、東教大（現・筑波大）、等、旧連盟 1 部チームの技術水準等が高く、学生バスケットボールの主流をなしていた。

3、社会人時代のバスケットボール

(1) 日体大バスケットボール部の指導

昭和28年3月、日体大を卒業し同年4月より同大学助手として勤務することになったが、教職員の少ないこともあって、故栗本義彦学長(栗本学長と略称)は私をバスケットボール部長に任命された。当時バスケットボール部は、故高山弘明氏が週1回授業後の放課後等を利用し指導され、昭和31年には、故石山平作氏が高山氏に代り指導された。私は部長として両氏の指導を補佐することにつとめたが、昭和32年より部長兼監督として直接選手を指導することになった。

同年の春季選手権において初優勝し、翌年の秋季リーグ戦においても初優勝、そして昭和35年より昭和40年迄の6年間は春、秋の両大会において6連勝、通算、春、秋7回の優勝を実現するとともに69連勝(新学連の大会)を達成した。

また、新旧両連盟主催の春季選手権には、昭和35年に第4位、昭和40年には第3位に入賞し、旧連盟の1部チームと互角に対戦できるまで成長してきた。特に、昭和41年の新春のオールジャパンでは、実業団、学生の強豪チームを破り幸運にも3位に入賞したが、今日の学生バスケットボール界における日体大の隆盛は、この時代の歴代選手等の努力による活躍が基礎になっていると考えられる。

昭和41年、新旧両連盟が後述の通り関東大学連盟お名称のもとに合併し、スタートした後のリーグ戦、インカレの成績を大雑把に顧みるに、リーグ戦では昭和44年に初優勝、昭和51年には2回目の優勝を初め、常に上位の成績を残している。この間、昭和44年より私の学内における多忙な役職のため、日常の練習は清水義明氏にコーチとして指導を委ね、私は部長兼監督として試合における技術、戦術等の指導を行うこととした。

更に、昭和53年から清水氏を監督に任命した。そして、後述する東京10大学連盟が関東大学連盟から脱退後の4年間は、優勝3回、2位1回。昭和57年、東京10大学と関東大学の両連盟が解散し、後述の関東男子学生連盟の加盟校になったが、部長として選手を指導し優勝4回、2位3回の成績を残している。

インカレについても主要な成績を顧みるに、昭和44年初優勝を初め優勝5回、2位8回の成績を残し、私の退職後の現在では、優勝14回の最多優勝大学として、斯界よりその活躍を期待されている。

女子バスケットボール部も、平成元年学長就任まで部長としてその任にあたったので、特にインカレについて大雑把に述べると、昭和34年、稲垣監督、荒木郁夫コーチの指導で初優勝し、昭和38年以降も当分の間私が監督を続けていたが、指導は石川武コーチに委ね、更に昭和43年以降は同氏が監督として指導され、愛知学泉大学とともに女子学生バスケットボール界のトップグループに位置してきた。優勝回数は両大学いずれも18回を数えている。斯界からの活躍の期待も大きい。

インカレの成績で特記できることは、日体大が男女アベック優勝を6回達成している事である。

(2) 関東大学連盟等の組織と役員

昭和41年、既述のオールジャパンで日体大が3位に入賞したことから、マスコミから、関東地区には関東大学と名乗る力の差のない新・旧連盟があることについて、何が『旧』で何が『新』かが厳しく批判された。

当時、私は日本協会の理事に就任し2年目でした。日本協会の理事会では、故吉井四郎選手強化委員長が大学チームの強化は強いチームの相互が切磋琢磨することにより実現さ

れ、これがナショナルチームの強化に繋がると新、旧両連盟の合併を驚倒され強調された。討議の結果、両連盟の合併を助言することになり、両連盟より選出されたOBによる協議の後、昭和41年より関東大学連盟として再スタートすることになった。私は常務理事に委嘱された。昭和46年より副理事長、昭和48年より昭和56年まで理事長に委嘱されたが、一体化した連盟が再び分裂するという不幸な事態が発生した。

昭和51年4月23日、故富田毅郎(早大OB)、故妹尾堅吉(明大OB)の両氏が、故松崎一雄(立大OB)会長を訪問し、関東大学連盟は、加盟チームが多くスケジュールが過密化され、チームの強化が出来ない等の理由により、7大学は関東大学連盟より脱退(退会)し、新しい連盟を結成するという趣意書を松崎会長に渡された。

これを受け4月28日の理事会でこの件について、審議したが、脱退する大学側理事と関東大学連盟側理事が対立し激論された。この問題はその後も理事会で審議され、6月26日の臨時総会で7大学は日本学連からも、脱退することになった。日本協会ではこのような状態を憂慮され、昭和52年度より速やかに関東地区の大学の組織の一本化を促進するため、両連盟から白紙委任状をとりつけた後、運営委員会とその活動をチェックするチェック機関を設置し、その解決策を図られた。その結果、関東の大学は縦割りグループ(関東大学連盟)、横割りグループ(7大学連盟)のいずれに所属しても良いことを提案され、運営委員会とチェック機関は解散した(昭和53年2月1日)。これにより、これまで関東大学連盟に所蔵していた3大学は、7大学連盟に加盟し東京10大学連盟(早大・明大・慶大・立大・中大・東大・法大・拓大・日大・一橋大順不同)が、結成された。

関東大学連盟では、松崎会長の退任により、その後任に6月、故鈴木正三氏(筑波大OB)を会長に選出したが、その後、鈴木氏の日本学連会長への就任により、後任には、井上一男氏(筑波大OB)が就任された。

日本協会では、昭和53年2月1日に関東男子学連の設置のため、9大学のOBのより発起人会ついで顧問会を設置され、顧問会では、故山田正司(立大OB)を会長に選出した。このことから関東大学連盟、東京10大学連盟は、関東男子学連の傘下になった。関東男子学連の理事会では、種々な事項が審議されたが、求めるところは常に両連盟の一本化であった。又、会長には特に日本学連理事長、関東大学連盟理事長、東京10大学連盟理事長三者による会議をしばしばもたれ、両連盟の組織の一本化を推進された。理事会や前述の4者会議を重ねるうちに、両連盟の理事間の対立的な態度も、次第に軟化し、昭和57年3月31日をもって、両連盟は解散することになり、新年度の4月より関東男子学連として再スタートすることになった。

関東男子学連では、その後、山田氏の日本学連会長への就任により、既述の井上氏が会長に就任された。私は、昭和62年副会長、そして山田氏が日本協会長へ就任後、井上氏が日本学連会長に就任され、その後を受け平成3年より、関東男子学連会長に就任し、平成6年7月に一身上の都合により会長を退任した。

(3) 日本学生連盟の役員

日本学連では、昭和36年に理事、昭和44年に副理事長に委嘱された。

昭和51年、旧学連では東京7大学連盟を認めないことから、山田 稔氏(早大OB)が理事長を退任された。昭和52年既述の松崎会長が退任され、鈴木氏が会長に就任。昭和58年、鈴木氏が会長を退任され山田氏が会長に就任された。私は理事長に委嘱された。理事長として、最初に手懸けたことは、従来、女子学連の関係者から強く求められていた国際試合出場における男子の優先権を、男女平等に改めたことである。平成元年3月同理

事長を退任し、平成3年3月、同連盟副会長、平成5年には会長に就任し平成6年7月一身上の都合により退任した。

（４）三菱電機カップ全日本男女学生バスケットボール選手権大会

インカレが表題のもとに開催されたのは、平成3年から平成10年までである。

この発端は、日体大男子バスケットボール部の清水監督が、前年度合宿、名古屋の三菱電機を訪問した時の事である。故岡本常務取締役(当時)より、これまで大学から多くの選手を三菱電機へ送ったことに報いたいという発案である。支援金は大学でも日本学連でもよいことであり、清水監督が合宿終了後帰学し、相談の結果、諸般の事情を勘案し、日本学連に特別協賛金としてお願いすることにした。私は直ちに岡本常務に会い、このことを伝えた。しかし特別協賛金は、日本学連が法人格を持たないので、日本協会を経由して受け取ることになり、特別協賛金の一部を日本協会の選手強化費として、支援することにし、三菱電機・日本学連・日本協会の3者による契約が成立した。三菱電機からは、インカレの支出経費として他に賞品、TV放映料等を含め高額になることを聞かされた。私は翌年5月、岡本常務の取り計らいにより、石川・清水両氏に三菱電機の橋本和明氏(日体大OB・現学連顧問)の5人で、当時の志岐守哉社長(故人)を訪れ御礼のご挨拶を申し上げた。

（５）筑波大対日体大の定期戦

両大学の学生は、歴史的に同好(体育・スポーツ)の友であり、私はかねてより定期戦の必要性を痛感していた。たまたま既述の、オールジャパン3位を契機とし、後日、学長室に栗本学長を尋ね、筑波大との定期戦について、鈴木正三さんと相談いただきたいと依頼した。これは栗本学長が東京高師(現筑波大)体育科の大先輩であり、かつて東京文理科大学(現筑波大)のバスケットボール後援会長を務められた等による。栗本学長はわたくしの前で即座に鈴木氏に電話され、両大学は、相携えて永年にわたり日本の体育・スポーツに発展に寄与してきたことは、自他ともに認められている。定期戦は両大学の選手等が将来同じ環境で手を取り合って、日本のバスケットボールの発展に寄与出来る土壌を作ることできわめて意義が深いことを力説されていた。そして私には鈴木氏とよく相談するように言われた。筑波大においても栗本学長の依頼であるだけに、鈴木氏が中心になられ関係者を集め、その実現についてまとめられたと推察している。

その後、私は東横線自由が丘の某店で鈴木氏と2度会い、経過について話し合った。定期戦の初期の数期間は、栗本学長が定期戦委員会の会長に就任されことから、筑波大では前川学部長を初め歴代の学部長が副会長に就任されたので、両大学を挙げての定期戦の観を呈していた。その定期戦も今回(平成17年)で40回を数え関東の大学や社会人選手やファンにバスケットボールのシーズンインを告げる役割鵜を担っているようにも思われる。

（６）日本バスケットボール協会の役員等

日本協会の役員は、昭和32年A級公認審判員の資格の取得から始まる。

昭和36年より東京オリンピック大会選手強化委員、オリンピック大会には施設委員を委嘱された。そして、昭和40年には理事を委嘱されたので、それより平成元年理事を退任する迄の24年間を大雑把に顧みると、昭和40年、技術副委員長を委嘱されコーチング小委員会委員長として研究会を主宰した。昭和42年ユニバーシアード東京大会には、女子チームのコーチとして、石田正一監督(早大OB)を補佐する。成績は第2位、昭和43年台北で開催された第2回アジア選手権には、コーチとして故小森正巳監督(筑波大O

B)を補佐する。成績は第2位、昭和45年クアランプールで開催された第3回アジア女子選手権には稲垣団長、尾崎正敏監督(早大OB)、現日本協会名誉顧問、鈴木常祐コーチ(早大OB)のスタッフで出場したが、日本がアジア女子選手権で初優勝をした歴史的に意義の深い大会となった。昭和46年より昭和52年迄女子強化委員長を委嘱され、尾崎氏を副委員長兼監督として、各所の国際大会に出場した。

昭和46年サンパウロで開催された第6回世界選手権には、稲垣団長・尾崎監督鈴木コーチのスタッフで出場し成績は第5位、昭和49年、ソウルで開催された第5回アジア女子選手権には、稲垣団長・尾崎監督・従野明宏コーチ(筑波大OB)のスタッフで出場し、成績は第2位、同年、イランのテヘランで開催されたアジア競技大会には、尾崎監督他補佐する支援役員として参加し初優勝した。

昭和50年コロンビアのカリーで開催された第7回世界女子選手権には稲垣団長・尾崎監督・石川 武コーチのスタッフで出場しソ連には敗れたが、準優勝を達成し、我が国女子バスケットボール史上に光輝ある歴史を創造するとともに、日本の女子バスケットボールの名声を世界に広めた。昭和52年より競技部長・昭和54年には再び女子選手強化委員長に委嘱され、昭和55年ブルガリヤのバルナで開催されたオリンピックモスクー大会の予選には、稲垣団長・中村和雄監督(芝工大OB)榎本日出夫(武蔵大OB)嶋田出雲トレーナー(日体大OB)のスタッフで出場したが、予選で敗退した。

昭和60年より平成元年迄はコーチコミッティを委嘱された。昭和62年1月、文部省(当時)は、『社会体育指導者知識、技能審査事業の認定に関する規定』を定め告示された。日本体育協会はこの事業を委託され、それによって日本協会は地域スポーツ指導員、競技力向上コーチ育成に関する専門的種目・バスケットボールの知識・技能を担当することになった。昭和63年社会体育指導者育成委員長に委嘱され、地域スポーツ指導員競技力向上コーチのカリキュラムを作成し、日本体育協会を通じて文部省に提出した。私が理事を退任した平成元年には、地域スポーツ指導員、翌年には競技力向上コーチの事業について認可された。平成4年、再び同委員長に委嘱され第1回の競技力向上コーチC級の講習会を開催した。平成元年には参与、平成2年より常任顧問を委嘱され今日にいたっている。

ユニバーシアードにかかわる委員会では、昭和57年より昭和60年迄、日本ユニバーシアード神戸大会組織委員会競技委員、昭和58年より平成元年迄日本ユニバーシアード委員に委嘱された。更に日本体育協会では、青木会長より平成3年より5年迄理事の就任を要請されたが学長として多忙なためお断りしたので、学識経験者として評議員を委嘱された。

(7) バスケットボール界への提言

我が国のバスケットボールを更に発展させるため、バスケットボールの技術に係わることについて提言したい。これらはわが国ではあまり認められていないが、同好者と共々追求したい。

1・『バスケットボールの本質的特性(属性)』を原理・原則にし、攻撃・防御の技術体系の追求

2・バスケットボールの攻撃の速攻、マンツーマンデフェンスやゾーンデフェンスに対する攻撃の3つを対象にし、一般的攻撃法より導かれる『一般的攻撃法の展開』を原理・原則として、それぞれの攻撃法の体系化の追求

3・バスケットボールの技術向上の指標となる『カテゴリー(熟練の程度をとらえる運動学独自の概念)』の追求

【おわり】

バスケットボール普及の立役者

東京都豊島区で尽力の宗田昭弘氏

[普及部]

Bリーグ発足4年目を前に男女日本代表チームの東京オリンピックへの出場決定、千葉ジェッツで1億円プレーヤー（富樫勇樹選手）の出現、渡辺雄太選手のNBAでの活躍、八村塁選手のNBAドラフトで一巡目指名といったトピックスが全国紙や全国ネットのテレビに、このところ頻繁に取り上げられるようになっている。それは、日本のバスケットボール愛好者として喜ばしいことであり、ここに至るまでの選手・スタッフは勿論、関係された皆様の努力に対して心より敬意を表したい。

さて、このような花が咲いた背景には、地域社会でバスケットボール普及のためにこれまで長年に亘り、汗を流してこられた数多くの関係者がおられることを忘れてはならない。

本誌ではこれから、このような草の根レベルでバスケットボールの普及に尽力してこられた個人や団体にも焦点を当てていきたい。

第一弾として、東京都豊島区で長くバスケットボールに携わってこられた宗田昭弘氏（昭和18年生まれ）を紹介する。



宗田昭弘氏は、NPO法人豊島区バスケットボール協会理事長、NPO法人豊島区体育協会理事、前豊島区立体育館館長、といった肩書きをお持ちである。

このたび、同氏がバスケットボールを愛する一個人としてお持ちの『素晴らしいバスケットボール「哲学」』（因みに同氏は大学院で哲学を専攻、修士号を取得）を聞かせて頂く機会があったので、その概要をまとめてみた。

宗田昭弘氏を語る場合、幾つかのキーワードがあり、加えてキーパーソンの存在も欠かせない。

<キーワード>としては：

1. 審判に対する熱い思い
2. 長期的な視野に立った戦略
3. 健常者と障がい者を区別しないソーシャルインクルージョンの取り組み

<キーパーソン>としては：

1. 高校時代の恩師である松原久三先生と、中大付属（杉並）高校を長年指導されてきた野口政勝先生
2. 昭弘氏の弟君で中大付属高校、中央大学、日本鋼管、日本代表で活躍し、ミュンヘンオリンピックにも出場した宗田研二氏（残念ながら、平成26年にご逝去）

3. 「おばちゃん」の愛称で選手や関係者に慕われ、影の功労者と誰もが認める昭弘氏の母上である宗田富貴子氏（残念ながら、平成5年ご逝去）

以下に、それぞれについてコメントさせて頂くので、昭弘氏のバスケットボール「哲学」の一端を汲み取って頂ければ幸いである。

<キーワード>

1. 審判に対する熱い思い

宗田昭弘氏が、バスケットボールを始めたのは、都立豊島高校へ進学後。中学時代は病気の後遺症でスポーツはドクターストップ。入学後、同級生何人かと当時、まだ弱小チームであったバスケット部に入部。そこで出会ったのが、後述の男女バスケット部顧問の松原先生。体力の問題もあり、十分な練習もできない中、松原先生は辛抱強く指導して下さいとのこと。

その後、昭和42年に母校女子部のコーチに就任、それを機にもっとコーチの勉強をしよう一念発起、近隣有名校の先生方にアプローチしたところ、そのほとんどが、快く受け入れて下さった。笛を吹くことを条件に練習に参加させて貰うこともあったが、そこで気づかされたのが、審判の大切さ。審判がしっかりしないとプレーヤーは楽しめない。

大学に進学後も、色々な試合を観戦したが、その中で気になったのが、帯同審判制度。誤解を恐れずにいえば、多くの場合、試合に出られないプレーヤーが仕方なく笛を吹くことが多く、本人のモチベーションも低く、その結果、試合が引き締まらない。

そんなことにうっすらと気づいたとき、某高校の有名な先生から頂いた「公認を取れば」とのアドバイスを思い出した。「審判を何とかしたい」毎年1回、2週間に亘って実施される区協会主催の講習会や、区内のジュニアバスケット大会での審判実習はあったが、都の推薦がなければ、日本の公認は取れないといった壁もあった。

そんなとき、これも後述の「おばちゃん」こと、昭弘氏の母上から「日本協会の審判トップに頼んでおいたから協会に行ってみなさい」といった思いがけないアドバイスがあり、昭和44年に日本協会のトップレベルの審判による講習会への参加が実現した。そんな経緯があり、昭弘氏の努力も実って、豊島区での審判育成の形が徐々に出来上がっていった。

「自分のところの審判は自分で育てる意識がないとダメ。ノーワッペンから始め、経験を積んでいけば、都の公認、日本の公認にチャレンジしてもよい」との考えから、現に豊島体育館には、独自の若手審判育成のシステムがあり、これまでに延べ70名近い日本公認審判員を輩出している。特別支援学校の先生や卒業生からは「豊島体育館の審判に吹いて貰い、バスケットの楽しさを知った。自分たちも審判にチャレンジしてみたい」といった声も挙がっている。

これは昭弘氏の個人的な見解と断ったうえで、ミニの審判について、若手が吹くと子供に甘えてしまう（ミスジャッジをしても子供は文句を言えない）のでベテランが吹くべき。また、「ミニからシニアまでつまり年齢層が違っても、原則、同じ日本協会ルールでプレーすることが望ましい」といったコメントもあった（現に豊島体育館では小学校6年生は3月には通常のリングで練習している）。

最後に、「審判はプレーヤーの為に吹く。よってルールブックとマニュアルをしっかりと読み込み、勉強してほしい。特に前書きを読み、正しいプレーとはなにか、良いプレーとはなにかを覚えてほしい」という締めくくりのメッセージがあった。

因みに、昭弘氏は、昭和47年度から54年度まで都協会競技委員会の副委員長・委員長としても活躍された。

2. 長期的な視野に立った戦略

上述した若手審判の育成システムの立ち上げ以外でも、この戦略が垣間見える。

体育館の使用については、土曜日の午後の時間帯をバスケットに2面開放しているが、他の種目から「バスケットを優遇しているのでは」とのクレームが出ないか尋ねたところ、昭弘氏からは「成り行きでそうなった」との説明があった。というのも他種目は平日の利用を希望した結果、バスケットは土曜日にやらざる得なくなり、色々と工夫して今日に至っているとのこと。指導員を雇い、未就学児童から小中高生、大学生、社会人、シニアまですべての階層に開放している（ミニバスという名称が無かった昭和42年にすでに小学生への指導を行っていた）。

バスケットでこのような取り組みができるまで半世紀かかったが、審判システムの確立と相まって、年間450試合をこなすまでになっており、東京都の中でも帯同審判制度を敷かないユニークな協会になっている。豊島区体協の中では試合数でスポーツ種目No. 2にまで成長した。

毎年4月～8月にかけて社会人のリーグ戦を協会主催で実施しているが、男女別以外に45才以上、60才以上のカテゴリーを設け、年をとってもバスケットを楽しめる環境となっている。その評判を聞き、豊島区外からの参加希望も多くいるが、区内チームで選手登録すれば、出場可能となっている。文字通り生涯スポーツとしてのバスケットボールの実践である。

将来の担い手になる小学生には運動遊び広場の提唱者である山梨大学の中村和彦先生の意見を取り入れ、複数のスポーツをすることを勧めている。現に火曜から金曜のバスケット以外のプログラムでも小学生が参加できる時間帯を設けている。

3. 健常者と障がい者を区別しないソーシャルインクルージョンの取り組み

娘さんのミニの応援にきていた車椅子のお父さんとの出会いがきっかけ。

車椅子バスケットは、下肢だけではなく、上肢に障害を持つ重度障がい者にとってはゴールの高さや動きについていけないといった点で、ハードルが高かった。

そこで考案されたのが、車椅子ツインバスケットボール。昭弘氏は上記のお父さん（同連盟委員長の弥富眞氏）と一緒にその普及に努めている。障がいの有無に関係なく、老若男女が楽しめるスポーツとするのが夢。豊島区中心に3チームを作り、45才以上や60才以上のバスケットチームの対抗戦プログラムに組み入れることを計画中。

<キーパーソン>

1. 松原久三先生と野口政勝先生

都立豊島高校へ進学後、バスケット部へ入部したものの、体力的な問題もあって十分な練習ができない中、辛抱強く見守って下さったのがバスケット部顧問の松原先生、昭

弘氏が現在もバスケットに情熱を注ぎ続ける事が出来る背景には、三分の一しかやり切っていない（友人の言葉）自分を見守ってくれた松原先生への感謝の気持ちがあると。

この気持ちを 中学校でバスケット未経験の弟の研二氏に向けた。研二氏を豊島高校の合宿に連れていき、パスやシュートを教えた。当時から有名であった野口先生からも足運びやステップの基礎を弟に分かるように教えて頂いたが、松原先生と同じことを云われているのに気づき、驚いた。野口先生の教え「野口バスケットの真髄」を如何に分かり易く伝承していくのか、大切な課題である。

2. 弟君の故宗田研二氏

上記の通り、昭弘氏は自分が出来なかった悔しい思いを弟の成長に振り向けた。野口先生の教えを弟にどう分かり易く説明すれば良いのか、考え抜き、そんな中で編み出したのが、ユニークなポストプレー。

ポストマンとしてずば抜けた長身を有するわけではないが、幅のある上半身、これを生かしたポストプレー、リングを見ないで足の位置だけを意識し、シュートは素早く打つといった指導を徹底してやった（これがあとになって先輩のオリンピック選手もびっくりする宗田研二選手の持ち味になるわけであるが）。

弟のポストマンとしての特徴を生かすため、上半身を徹底的に鍛えたが、同時にスポーツマッサージを覚え、弟の筋肉をほぐすことにも注力した。このような経験を通して、バスケットを益々好きになっていく自分に気づいた。

3. 母上の故宗田富貴子氏

昭弘氏によると母上は、弟の研二氏の試合を、欠かさず、観戦されていたとのこと。その過程で日本バスケット界の幹部の方々との交流もあってか、昭弘氏の審判育成への熱い思いを受け、審判トップへのアプローチでサポートもなされている。

開設された豊島体育館の食堂・売店の実質的な責任者として行政からの依頼で切り盛りされていたのではあるが、体育館に集まった選手や関係者の練習後の憩いの場・癒しの場とでも表現できようか、その温かいもてなしの姿勢が多くの人をひきつけ、「おばちゃん、おばちゃん」と慕われておられた。まさに「影の功労者」である。

編集後記

「蒲田さん、プラザの取材なら、豊島区に面白い人がいるので、紹介するよ」と振興会の諸山理事から教えられたのがきっかけ。名前を伺うと宗田昭弘氏、ひょっとすると昭和40年長崎インターハイ同期で、その頂点に立つ宗田研二選手のお身内かなと思いつつ、期待と不安な気持ちで初めてお会いした。

ややこわもての偉丈夫。酒を酌み交わし、バスケット談議に耽るにつれ、とても熱いバスケットマンであることが分かってきた。こんな人が、今でもおられるんだ。そして読者の皆様には是非、知って頂きたいと思い、纏めたのが上記駄文。

昭弘氏の熱い思いが果たしてどれほど読者の皆様にお伝えできたか、甚だ心もとないが、御笑覧頂ければ幸いである。

閑話休題、我ら団塊同期の憧れであった研二選手と母上の「おばちゃん」、ともに既に黄泉の国に旅立たれているが、生前にお会いしたかった。

こんな気持ちも込めて筆を運びました。

（文責 蒲田 尚史）

中学生初心者向けクリニック

京都市と世田谷区で開催

[総務部・普及部]

京都市開催

5月19日（日）、京都市で地元中体連主催、振興会協力による中学生初心者向けクリニックが開催された。参加者は男子2校8名、女子2校9名、計17名と例年に比べ少人数であったが、当会理事の結城講師の指導の下、約2時間半、「シュートを上手くなろう」とのテーマで実施。少人数のため、かえって中身の濃いクリニックとなった。本年も地元の京都教育大学から男子選手2名がデモンストレーターとして参加、お手伝い頂いた。謝意を表したい。

< 結城講師によるクリニックの概要 >

ランニング、に始まり、ボールハンドリング、パス、ドリブルと続き、最後にショットドリルとこれまでに何度も本誌で紹介の「結城理論」に則ったクリニックを実施した（詳細は割愛）。



< 結びに >

京都市での開催は6回目であるが、参加校が4校、参加生徒数が男女合わせて17名と例年に比べ少人数（本年4月より公立中学で土日連続の練習が難しくなったため、参加校

が激減)であったが、その分、中身の濃いクリニックとなった。今回も開催に当たり、当会会員で京都市在住の藤野英雄氏、龍谷大学付属平安中学校教諭の岩崎広行先生には、会場の手配、参加生徒の募集等々で大変お世話になった。又、当日は4名の先生方が生徒さんの引率で参加、クリニックでもお手伝い頂いた。誌面を借りて謝意を表したい。

東京都世田谷区開催

7月13日(土)、世田谷学園体育館で世田谷区中体連バスケットボール部主催、振興会協力による中学生初心者向けクリニックが、開催された。

当日は、公立中学校は授業がある為、参加者は区内の男子私学2校から25名、女子私学2校から23名の計48名と例年に比べ、人数は少なかったが、当会会員の桑田健秀氏、元エバラヴィキーズの水澤春奈氏の指導の下、熱のこもったクリニックが実施された。

<桑田講師と水澤講師によるクリニックの概要>

I 桑田講師による講話

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控え「特に障害を持つパラリンピアン、あまり接触したことがないかもしれないが、交流を持ってほしい。多くは生死をさまようような世界を体験してきており、それを乗り越えるのに、どれほど苦勞してきたかにつき、思いを馳せてほしい」といった内容の話がなされた。



II 水澤講師によるドリブルの基礎ドリル (詳細は割愛)





III 桑田・水澤両講師によるシュートドリル（詳細は割愛）



<結びに>

今回は7月実施の第三回目。クリニックの後に30分程度、学校対抗のゲームを行った。

1年生だけ、特に初心者だけでゲームをする機会はほとんどなく、初めての経験。最初は戸惑いも見られたが、慣れてくると中学生らしいパスの連携プレーも随所に見られた。

昨年に引き続き、今回も開催に当たり、世田谷区中体連の専門委員である世田谷学園の古見先生には、会場の手配、参加生徒の募集等々で大変お世話になった。同学園の2年生17名には、ゲームでの審判やTOをボランティアで担当してもらった。

又、当日は2名の先生方が生徒さんの引率で参加頂き、保護者4名の方にも見学頂いた。誌面を借りて謝意を表したい。

（文責 蒲田 尚史）

シニアチーム紹介 駄馬

[普及部]

普及部では、本誌紙面で全国のシニアチームを逐次紹介することとした。
各チームに、歴史にはじまり、特色ある面を存分に吹聴頂きたいと思っている。
最初を、東京のチーム「駄馬」にお願いしたので紹介する。

バスケットボールチーム「駄馬」創部50年の歩み

阿部 哲朗
片山 祥二



最近の駄馬メンバー

バスケットボールチーム「駄馬」の誕生の根源は、世田谷区立烏山中学校にある。

昭和41年に本堂元規という一人の若い体育教師が、わずか1年間だけ烏山中学校のバスケットボール部の顧問として指導にあたったのである。この時期のメンバーで今日まで駄馬の中心メンバーとして活躍してきたのが、当時3年生だった橋田龍太郎、1年生が阿部哲朗、神山 毅（平成27年1月25日逝去）、大沼正夫、藤田覚史である。

このチームは、戦力としては弱かったものの、本堂先生の人柄と熱い指導のお陰で彼らは1年生～3年生までチームとして一つに纏まり、またバスケットボールの魅力に取り付かれることになるのである。

このメンバー達が、烏山中学校を卒業した昭和44年(1969年)に阿部哲朗を中心に「烏中OB」という名称でチームを作り秋の世田谷区民大会に初出場し、対駒場大付属高OBチームに48:33で初戦初勝利を飾った。

その後、世田谷区民大会に出場を続けながら、昭和46年にチーム名を新しくしようという事になり、メンバーの藤田覚史の中学時代のあだ名であった「駄馬」を新しいチーム名に採用したのである。そして昭和47年10月8日の秋の世田谷区民大会が「駄馬」としての新たなデビュー戦となり、対出光興産に45:35で快勝したのである。

しかしその後、活動は続けていくものの、昭和51年以降次第に活動は停滞していく。理由は主力メンバーが社会人となり、仕事中心の生活に変化していく中でバスケットどころでは無くなったからである。時には試合に5人しか集まらず、一人が5ファウルで退場となったところ相手チームの恩情で救済を受け、特別に復活出場を許されて試合が続行できたこともあった。無論練習などする暇も無く、ぶっつけ本番で世田谷区民大会のみ参加していたが、不甲斐なくも1回戦敗退の常連チームとして細々と春と秋の大会に毎回出場を続けていた。

この様にいつ消滅してもおかしくない状態の駄馬を、いつからか様々な人達が支えてくれるようになっていったのである。それは駄馬のメンバーの友人達でその当時大ヒットしたTVのバラエティー番組「笑っていいとも」の友達の輪の謳い文句である「友達の友達はみんな駄馬」とバスケット仲間の輪を広げながら何とかメンバーを集めていった。こうして駄馬は世田谷区民大会に出場を続け存続していったのである。この期間、昭和52年～平成5年までの17年間は駄馬にとって苦難の時代であったと言っても過言では無い。

この時代に大きな変化が生じたのが、主力組(昭和28年生まれ世代)が40歳となった平成6年である。阿部の都立目黒高校時代のバスケット部の友人で駄馬のメンバーになっていた小田尚孝(平成23年12月18日逝去)が突然狂ったように「練習をしよう!」と言い出した。そして自ら渋谷スポーツセンターの体育館を確保するようになって駄馬の練習がスタートしたのである。

その後、翌年の平成7年には藤田も自らが勤める出版会社のコネを使い、東武練馬の「すこやかプラザ」の体育館を確保するようになった。この施設は出版社組合の健康保険施設で設備も充実しており、何よりメンバーが大変喜んだのが大きな浴室が完備されているという事である。そしてこの施設を利用するようになって駄馬には20歳代からの若い仲間が増えていくことになるのである。

平成9年には世田谷区民大会も参加チームが増えて2部制になり、駄馬は2部に登録され、何とか練習の成果もあり、その中で1回戦位は突破するようになっていた。そのような状況の中で平成11年(1999年)にメンバーにとって驚くべき出来事が起きた。なんと世田谷区バスケットボール協会から30年間大会出場を続けてきたという事で優秀団体賞の表彰を受けることになったのである。気が付けば駄馬はこの時、創部から30年が経過していたのである。

この頃からメンバーのリーダー的存在であった橋田龍太郎が、渋谷に住んでいたということもあって渋谷区の廃校になった小学校、中学校の跡地利用のコミュニティ施設の体育館を毎週確保するようになっていた。またこの時期になると友達の輪は相当広がり東海大学のサークル仲間や光が丘中学校のOB連中、そしてその女子友達など20歳そこそこの

若いバスケット仲間も多数練習に参加するようになっていた。若い連中が練習に通い始めると、何時しか恋愛の花もちらほら咲くようになるのが常である。案の定、駄馬で知り合って結婚まで至ったカップルが9組にもなっている。これもバスケットボールを永く続けたチームとしての一つの賜物で、試合に勝つ以上に嬉しい現象と言えるであろう。今日ではそういったママさん、パパさんになったメンバーが、その子供さん達を連れて練習に顔を出すのが日常となっている。さながら駄馬の練習風景は何処かの保育園の様でもある。ゴールデンシニアのメンバーにとっては孫が何人でも出来たようなハッピー感が漂い、バスケットボールをするより子供をあやして楽しんでいる様な光景を目にする。

平成13年(2001年)に駄馬のシニアにとって転機が訪れた。以前より親交のあった新宿高校のOBで粕江市のシニアチームの望月さんから埼玉県東松山で開催される「全国シニアバスケットボール交歓会」に粕江チームの助っ人として参加しないかとのお誘いがあった。この大会は今日の日本バスケットボール振興会が開催している「全国シニアバスケットボール交歓会 in YOYOGI」の前身の大会である。

この大会に駄馬から初めて橋田龍太郎、吉田俊幸、大沼正夫をなど数名の選手が参加したのであるが、この大会を境に粕江チームの参加者が徐々に減っていき4年後の平成17年には正式に「駄馬」として参加することになるのである。これを契機に関東近隣のシニアチームに駄馬が知られ、シニアバスケットボールの世界にメジャーデビューを果たすことになるのである。

その後、東松山でのシニア交歓大会が無くなり、吉田と橋田が自分達で関東近隣のバスケットボールチームを呼んで手製の交歓大会をやろうと言い出して、平成21年に新潟魚沼市で駄馬主催による交歓大会を開催した。この大会には千葉、埼玉、新潟、茨木などのチームが参加して、今もなお越後湯沢で「山本杯」として継続開催され、今年で11回目を迎えている。

ところでその「山本杯」の大会名の所以であるが、そのネーミングの人物は東京オリンピックの監督であった吉井四郎先生の愛弟子で、東京教育大学から実業団チームで全国制覇を遂げた熊谷組で大活躍され、今は駄馬の一員としてご活躍されている「山本 治」さんである。

平成24年の6月、橋田がある人物を練習に招待してきた。その方が山本さんだったのである。橋田は前日に行われた振興会主催の全国シニアバスケットボール交歓会の懇親会の酒席で山本さんと意気投合し、是非駄馬の練習に顔を出して欲しいと懇願したそうである。山本さんはその頃80歳に近いお年ながら、ご自身の住む板橋区の体育館で時間を見つけては個人的に少年達にバスケットボールを指導しながらバスケットボールの普及に熱心にご尽力を注がれていたのである。

またその頃には駄馬は橋田や他のメンバーの努力の甲斐もあり、原宿中学校の廃校施設である「ケアコミュニティ原宿の丘」、渋谷の「文化センター大和田」、東武練馬の「すこやかプラザ」を中心に毎週土日体育館を確保出来るようになっていた。そしてそこにはバスケットが大好きな仲間達が老若男女を問わず常に20～30人は集まっては賑やかに試合形式の練習を行うようになっていた。その様な「バスケットが大好きな仲間」に「いつでもいっちゃい」とクラブの門戸を大きく広げバスケットに没頭して汗を流すことの出来る環境を提供している駄馬のチームの姿。そして、山本さんのバスケットをこよなく愛し生涯を通して若い人達にバスケットの魅力を伝えて行こうという姿勢や方向性が上手

にマッチングしたのであろう。それ以来、山本さんは駄馬の一員として85歳になられた今もメンバーの精神的な拠り所としてご活躍頂いている。

振り返ると駄馬の50年の歩みは、一人の体育教師のお陰でバスケットボールを愛することになった16歳の若者達が、単純にまた素直にその情熱を今日まで持ち続け、肩を張らず欲張りもせずただ単にコートの上でバスケットボールを追い続けて来たに過ぎないのである。バスケットボールはチームスポーツだ。だから決して一人では出来ない。それには仲間やメンバーが必要である。

試合に出るため、バスケットボールをするためにメンバー集めに苦労して走り回って掻き集めてきた歴史があるからこそ、仲間の大切さが痛いほど理解出来た。そこまで気持ちを動かしたのは、強くなりたい、試合で勝ちたいというよりはただ単にバスケットがしたいという情熱だけに他ならない。だから駄馬は仲間を大切にする。

「来るものを拒まず、去る者は追わず。」これが駄馬の精神だ。バスケットが好きだ！バスケットがしたい！というバスケット難民？にいつでもバスケットボールが出来る環境を作って提供し続けたいというボランティアめいた精神が駄馬にはある。

東京オリンピックを来年に控え、日本チームは何とかその出場を勝ち取ることが出来た。選手ではBリーグで初めて1億円プレーヤーとなった富樫選手、また日本人で初めてNBAのドラフトで1巡目指名を受けた八村 塁、そしてNBA出場史上二人目の日本人選手の渡邊雄太など最近ではバスケットボールに関するビッグニュースが事欠かない。

それだけバスケットボールは世間の注目を受け、その人気はヒートアップする一方である。そしてその3名が日本のバスケットボール界の頂点であるならば、駄馬は毎週土曜日と日曜日にバスケットボールが出来る場所を確保し続けることで、これからも沢山のバスケットボール難民を救済しながらピラミッドの最底辺にあってバスケットボール界を支え続けていきたいと思う。



試合中のシニアメンバー

令和元年(2019年)の今、駄馬に登録しているメンバーの数は150名を超えるほどの大所帯となっている。また関東ゴールデンシニアバスケットボール連盟に登録している満60歳以上のメンバーは85歳の山本さんを筆頭に25名にもなっており、中には50歳を超えてからバスケットボールを始めた者もいる。

そして駄馬のメンバーの殆んどが、中学、高校の部活経験者であり、チームが強くなりたい、試合で勝ちたいということでの動きが良く、バスケットボールが上手な選手のスカウトや引き抜きを今まで一切行っていない。メンバー自らインターネットや何処からか駄馬のことを知って入ってくるか、現メンバーの紹介やツテで加入してくる者ばかりである。

チーム名通りのそんな弱小チームであるが、メンバーは何歳になってもバスケットボールが出来ることを喜びながら、何時までも「駿馬」ではなく「駄馬」であり続けたいと思っている。

以上

人物抄

油井 康 さん



油井さんは、岩手県ご出身で83歳、大変お元気で現在でもシニアチーム岩手マスターズで監督をされるとともに、プレーヤーとして試合にも出ておられる。

お住まいは岩手県奥州市の水沢だが、振興会の行事の際には、その都度上京され、それらに率先して出席される熱血漢でもある。

バスケットボールを始めたのは中学時代で、3歳年上のお兄さんに勧められて取り組まれた。お兄さんはラグビーをやっていたが、弟の康さんに対してはバスケットを勧めた。なぜですか？と聞くと「兄は負けず嫌いだったので自分と違うスポーツを勧めたんだと思

う」と微笑ましい答えが返ってきた。

ご出身の岩手県奥州市水沢で司法書士として事務所を構えられている油井さんは、いわばバスケット狂と言っても過言でないほどのバスケット好きで有名である。

このほど油井さんに取材申し込みをしたところ、ご自分でバスケットの履歴を書いていただいたので、下記の通り掲載することとした。

油井 康

横浜カップ越谷大会で同宿だった、駄馬の山本治さんとお会いした懇親会の席で、ビールを飲みながら故糸山隆司さんのことが話題になった。

懇親会の出席者には糸山さんとの思い出を語る方が多く、糸山さんは私のバスケットボール人生に大きな影響をもたらした、いわば齢(よわい)80歳までバスケットにのめり込む私を作ってくれた方でもある。

私の母校である岩手県立水沢高校は、旧制水沢中学と水沢商業高校、水沢女学校を合併して創立された歴史の浅い高校で、バスケットボール部は指導者のいない弱小チームだった。

東京教育大の在学学生であった及川信一さん(国立競技場場長、岩手県教育庁保健体育課長、奥アンツーカー(株)社長を歴任)の推薦で同大学下級生の土屋廣さんが水沢高校のコーチとなり、東京教育大とのつながりができた。

土屋さんはその後、地元名家の養子となり石川に姓を変えた。

夏休み、冬休み、春休みの3回は必ず帰郷した土屋さんは、その都度チームメイトを同伴して水沢へ来てくれた。私が高校へ入学した年には栃木女子高校や木更津高校の女子チームが石川家で合宿し、コーチとして青井水月さんや野口昌三さんらが帯同されていた。

私はその合宿を見て、目にしたこともないような素晴らしいプレーに魅せられ、いやが上にもバスケットボール熱が高まった。

その後、久喜高校の合宿で加藤雅春さん、滝野川高校の合宿で石原文吉さんが水沢に來られて指導してくれた。

毎年1月、4月、8月の年3回、石川さんは後輩の糸山隆司さんを帯同してくれた。当

時は教室に机を並べ、その上に柔道の畳を敷き詰めて寝床を作り、夜具を敷いて寝泊まりしたが、糸山さんは私ら高校生と同じ環境で合宿し指導してくれた。

合宿の初日、朝起きると糸山さんはもう部屋にいない。体育館に出ると彼は一人でシューティングをしていた。私も負けじと早起きして体育館に行くと、練習を終えて汗を拭いていた。翌日、翌々と合宿が終わるまで、私は糸山さんの前に起床することはできなかった。

その頃の糸山さんは、日本のエースセンターとして国際試合でも活躍していた時だったので、あらゆる練習をしていたのだと思う。インサイドのプレーに加えてアウトサイドのプレーも不可欠と考え、そのための練習をしていたようであるが、ボール拾いのお手伝いもせず、後ほど悔やんだものである。カレーライスと一緒に食べながら、アジア大会の話の聞いたり、佐賀弁に加えてすぐに覚えた岩手方言を交えての楽しい合宿だった。

監督石川廣、コーチ糸山隆司の水沢高校チームは、幸いインターハイ予選を2年連続して勝ち進み、私が2年生のとき酒田大会、3年生のときに新潟大会へ出場し、新潟大会ではベスト8に進んだ。その時の相手は地元の新潟三条高校で、観客が仮設スタンドを揺るがす足踏み応援に完全なアウェー状態、萎縮しながらの試合展開だったが、後半残り3秒に相手センターの金川（後立教大から新日鉄）が5ファウルで退場、フリースローで2点を取って逆転したが、替わって入った小柄な選手がマッチアップの隙を潜り抜けてゴール近くまでドリブルで突進し再逆転されてしまった。

私は卒業後、国家公務員として採用され、盛岡地方法務局に24年間勤務し、昭和55年(1980)に退職して司法書士の資格を取得し、現在でもその仕事を続けている。

公務員としての勤務や司法書士業務の合間に、母校水沢高校のアシスタントコーチを引き受け、岡山国体で5位、インターハイ出場も成し遂げた。

その後、岩手県ミニバスの組織を作り、ミニバスチームの指導と全国大会出場、愚妻が監督する中学校のコーチ、岩手県ミニバス連盟理事長、岩手県協会常任理事、奥州市協会会長の職務に携わりバスケットボールに繋がりをもってきた。

70歳になったとき、指導者としての年齢差を痛感し、一切のかかわりを無くし八幡カップに一選手として参加することを決意し、以来八幡カップ、横浜カップ、東松山大会、代々木大会に参加出場して恥をさらしている。

シニアのいずれの大会でも、参加選手たちと百年の知己のように口角泡を飛ばしてバスケットを語り合う。数多くできたそんな仲間と、あと何年プレーすることができるかが話題となる昨今である。

岩手ゴールデンシニアのチームは、現役時代に活躍した選手を私が呼びかけて集め、それに参加希望者を入れて編成し、シニア大会に出場している。月3回の練習を計画しているが、何せ四国4県に匹敵する県の広さから、一か所に集めて練習することは至難の技で、盛岡と奥州に分かれて大会前に1～2回の合同練習を行っている。



奥州市での練習は、花巻、一関から約1時間、大船渡からは2時間を要し、なかなか思うに任せない。それでも参加希望者が多く、どの大会でも20名を越える参加者で嬉しい悲鳴を上げている。

この2年余りで振興会の総会に出席する機会を得て、佐室前会長、小澤副会長、渡邊理事長、従野さん、山本治さんらと共通する昔話に花を咲かせているが、特に小澤さんとは偶然にも生年月日が同じで、冗談を言い合いながらの楽しい時間が過ごせている。

岩手のバスケットボールは、Bリーグ発足時に岩手ビッグブルズで盛り上がったが、B3に転落してから人気も集客力も下降してしまった。

岩手出身で中央において活躍した選手は、三浦真造、三浦祐司、川村拓哉以来絶えて久しい。

野球では、岩手県出身の大谷、菊池、銀次や、岩手で育った西武の山川や外崎が活躍しているのに、バスケット界では有名選手が出てこないことに歯ざしりしている現状である。
以上

油井さんは、第10回シニア交歓大会が開催された代々木第二体育館でプレーされたあと、すぐに振興会に加入され、以後は総会や秋の講演会交流会に岩手から上京されて参加しておられる。

バスケット狂というよりも、多くの仲間と共同してシニアバスケットを盛り上げるとともにバスケットボール界の更なる発展を支えたいという信念を持っておられる。これはお元気でおられるからこそ言えることで、誰でもできることとは限らない。

そしてご自身が監督を務めている岩手マスターズで、20名に及ぶ選手たちにも暖かく接し、大会の都度選手たちの出場機会を配慮するいわば年の功も備えておられる。

83歳という高齢であっても、努力を続ければバスケットの試合に出場可能であるという見本のような存在でもある。

油井さんのバスケット狂がこれからも末長く続くことを期待したい。





21世紀はダブル活躍の世紀

島本 和彦

6月22日の日本の全国紙の夕刊は、1面トップがすべて八村塁君のNBAドラフト1巡目の9位にワシントン・ウィザーズに指名された記事で埋められていました。ものすごいことです。私に生あるうちにはまず「ないんじゃないか？」と思っていましたから。

NBAがシーズン中に1987年から定期的に日本で放映されるようになって32年。こんな人が出て来るんですね。だから「人間の可能性というものは計り知れない」と、またまた思われました。

ここで、NBAドラフトに関する日本人関連のファクトをおさらいしておきたいと思います。

そもそも、NBAというものの存在を帰国子女や、アメリカに留学していた学者や学生しか知らなかった時代の1981年NBAドラフト8巡目（当時は10巡目までありました）全体の171位に大阪商大の岡山恭崇（230 cm）さんが指名されたのが始まりでした。

日本のバスケットボールにとってオリンピック出場が最も大切なものであり、プロのチームと接触すること、イコール、アマチュア規定違反（オリンピックにはアマチュアしか出られない）となります。その頃、住友金属に所属していた岡山さんやチームはNBAからの一方的な指名は無視する以外の方法はなかったのでしょう。

しかし、その裏には日本のバスケットボールの技術顧問的存在のピート・ニューウェルさんが介在しており、NBAには行かないだろうという日本の現実は知りつつも、自らが関わっていたゴールデンステイト・ウォリアーズに指名させたという話を聞きました。

ピートさんは岡山さんの大きさの選手を鍛えるには同様な体格の人間のいる中でと考えたようです。岡山さん本人も「NBAに行けるなんてこれっぽっちも考えていませんでした」と語っていますが、今、八村、渡辺、馬場、比江島君らが参加しているサマーリーグやキャンプを経験していたら、また少しは違ったバスケットボールになったかもしれませんね。

そして、続いては2004年9月7日にドラフト外で田臥勇太君がフェニックス・サンズとの契約を勝ち取りました。4試合の出場にとどまりましたが、NBAのコートに立ってプレイしたことで日本人には無理だと思われた、NBAの高い分厚い壁を乗り越えたのでした。現在もBリーグ宇都宮で活躍、そのゲームに対する周到な準備の仕方でも周囲をけん引しています。

それから14年、香川の尽誠学園高からセントトーマス・モア（プレップスクール）を経てジョージワシントン大でNCAAのD1のレベルを経験した渡邊雄太君。彼はドラフトにはかかりませんでしたが、NBAとGリーグの両方に出られる2ウェイ契約でメンフ

会員だより

イスグリズリーズとの契約を結びました。献身的なディフェンスと運動量で存在感を示し、2年目のシーズンに突入です。何だか余裕をもってプレイする2年目のサマーリーグでは頼もしい存在となっています。

さて、4番目の男八村塁君は新人の出場するサマーリーグで早くも本来持っているポテンシャルを発揮しているようです。やはりゴンザガ大での3年間の経験は素晴らしい蓄積となっているようで、ドラフトトップ10位内のプレイヤーの実力を見せつけています。

いろいろなメディアでかなり詳細に報道されているので割愛しますが、かれはベナン人の父（ザカリ・ジャビル）と日本人の母（八村麻紀子）との間に生まれたダブル。一般的には「ハーフ」、お父さんの血、お母さんの血半分というように表現されていますが、私は両親の両方の良い血と異なった文化の両方を受け継いでいるのではないかと考える派なので「ダブル」と言いたいのです。

このような考え方になったのは月刊バスケット創刊の時に、モスクワのユニバーシアードの取材に派遣された時のことです。約3週間、あらゆるスポーツの世界一身体の良い素晴らしい能力を持った学生に囲まれていた時でした。自分は見えませんが他人は常に見える。その素晴らしい身体を毎日見ていたのですから、帰りのモスクワの飛行場で日本人のツアー客を見た時に、なんと小さい人種なのだろうと感じたのです。

ふだんの旅行でならおそらく何も感じなかったと思います。しかし、その充実した3週間、毎日男子代表チームのHCの細島繁さんと日本人の体格やサイズについて話していたのです。細島さんは「日本人も人種間の交流が増え、コンバイン（混ぜ合わせる）しないと良い選手は生まれて来ないよね」と結論付けていました。

その時、私は彼ほど深刻には考えていませんでしたが、あれから40年、ダブルの子たちがどんどん出てきているではないですか？ 陸上のサニブラウン・ハキーム、ケンブリッジ飛鳥、野球のオコエ・瑠偉そしてバスケの八村塁君。この後続々と続くといえます。まさに枚挙にいとまがないと言って良いでしょう。

前回の東京オリンピックから55年の現在、さらに増殖するのは間違いのないところでしょう。どんな世界がひらけてくるのでしょうか…。

[理事・月刊バスケットボール 元編集長]



アジアのバスケット好きな仲間たち

その４：第１５回アジアカップ バンコック大会

鈴木 承二

今回は、首記大会についてバンコックの五十嵐正幸氏に報告をいただいたので紹介する。

第１５回アジアカップ バンコック大会を振り返って

バンコックチーム 五十嵐 正幸



2005 年第一回香港で開催されたアジアカップ、15 年の歳月を経て今回のバンコックで15 回目となる。この大会の特徴は海外（主に東南アジア）にシフトされた日系の企業で働くバスケット好きな仲間たちが集い、競い、そして離れた日本のバスケット談話に“花”を咲かせ、親睦を重ねるところにある。

今回の第15 回バンコック大会は男子17 チーム、女子5 チームで登録選手242 名と応援も含め270 名を超える大きな大会であった。

グローバルな経済状況と流れの早い“物作り”の拠点が想像を超えた速さで進み、昨年のA 国のメンバーが、今年はF 国メンバーとして参加するという面白さも兼ねている。

今年はミャンマーの“ヤンゴン”からの初参加もあり大会を盛り上げた。男子は17 チーム（バンコックは2 チーム参加）でトーナメントにより2 会場での予選を行い、5 位～8 位決定戦、3 位決定戦から決勝戦まではホーム競技場の Banna-Pro で行われた。

女子は5 チームの総当り戦で、バンコックの中心から北20 キロ先の“Harrow Intel School”での会場で10 試合が組まれ、熱い戦いが展開された。

女子順位

優勝 ベトナム 4 戦全勝、**2 位** バンコック 3 勝1 敗、**3 位** 香港 1 勝3 敗
4 位 インド/ジャカルタ合同 1 勝3 敗、
5 位 シンガポール/ KL /ヤンゴン 1 勝3 敗、

* 同率勝敗は総得失点差で順位を決定、

女子個人賞

- ・ **ファール王** シンガポール 佐藤千春 (7 回)
- ・ **得点王** オールベトナム 田中 光 (39 ポイント)
- ・ **3 ポイント** オールベトナム 田中 光 (11 本)
- ・ **M V P** オールベトナム 田中 光

* 暑い国での熱い戦いであった、

会員だより

男子順位

優勝 マニラ、 2位 シンガポール、 3位 バンコックA、 4位 北京、
5位 ホーチミン、 6位 広州、 7位 台北、 8位 インド、
9位 バンコックB、 10位 クワランプール、 11位 香港、 12位 上海、
13位 蘇州、 14位 深圳、 15位 ヤンゴン、 16位 ハノイ、
17位 ジャカルタ

男子個人賞

- ・ファール王 クワランプール 赤嶺生朗、香港 北住陽平（1試合平均 2.7回）、
- ・得点王 広州 井岡浩介（1試合平均 19点）、
- ・3ポイント 台北 李 Wenlin、シンガポール 藤沢 元（1試合平均 2本）、
- ・ベスト5 マニラ 金子 竣、シンガポール 関 淳平、シンガポール 藤沢 元、
クワランプール 飯間 健太、バンコック 廣瀬 顕、
- ・M V P マニラ 田辺一平

- ・皆勤賞 ホーチミン 直原 由樹夫

2019年15th アジアカップ バンコック大会は、参加チームが22チームでタイトなスケジュールであったが、バンコックのシニアチームが準備段階からの参画で緻密な計画をこなしての手伝いが結果として今大会を盛り上げた。総勢280名のバスケット好きな仲間たちが来年の(2020年)16th アジアバスケット大会を中国“深圳”での開催と決めた。



皆勤賞の直原由樹夫氏



乾杯の挨拶 工藤洋平氏
バンコックB代表

今回の懇親会は、宿泊先の Pullman Hotel で、表彰式が行われるとともに“バスケット”の仲間が大いに盛り上がり親睦を深めた

“世界におけるバスケットの競技人口は約4億5千万人、2位のサッカー（約2億6千万人）を大きく引き離れた。日本も同じでバスケット人口が増えている。日本人のNBAプレーヤーが増えて人気が出てきているが、それらをサポートする我々の方も色々の方面での参画をしなければならぬと感じさせられる。

以上

モルテンNEWボール

新品でも滑りにくい性能

[編集部]

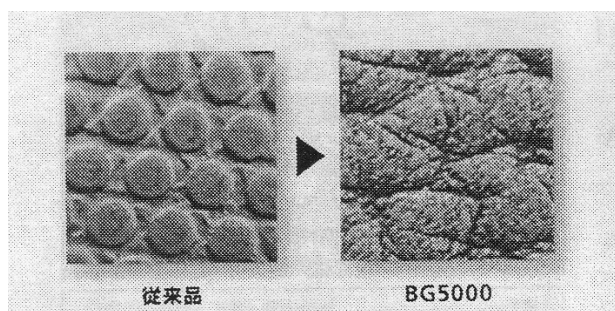
ボールメーカーのモルテンが、このほど新しい性能を持ち備えたNEWボールBG5000を開発、販売を始めた。

これまでのボールは手に汗をかくと滑りやすく、公式戦においては新品ボールの使用を控えるよう審判部からの要請があったが、新しい性能のBG5000ボールは新品でも滑りにくいボールになっている。

以下にメーカーが主張するコントロール性能の向上を記してみる。

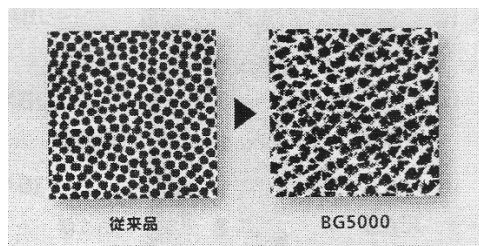
汗による滑りの抑制

汗がついた手でも滑りにくくなるよう、表皮に従来品とは異なる加工を施している。



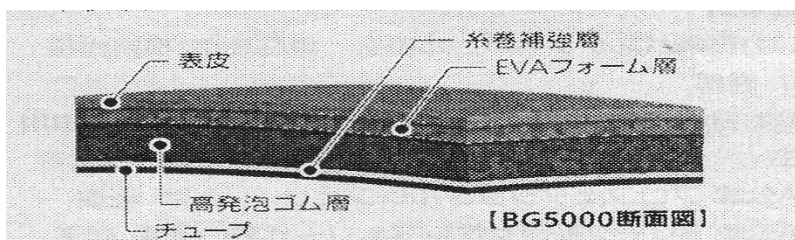
グリップ性能の向上

新シボ形状を採用しシボ一つ一つの平均面積を大きくしたことにより、指先との接触面積が拡大し、グリップ性能が拡大した。



より良いやわらかさの実現

内部構造に改良を加え、発泡ゴム層を従来品比で35%増やした。また新たにEVAフォームを採用している。より良いやわらかさを実現し、よりつかみやすくボールコントロールがしやすくなっている。



新シボ形状

天然皮革の美しさを引き出す新シボ形状の採用。



訃 報

手嶋 昇 氏 令和元年6月30日 享年 93

長年にわたり、振興会会員として、日本バスケットボール界発展のため多大のご尽力を賜りました。
ここに、謹んで哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

手嶋 昇先生 を偲んで

深尾 秀次



日本バスケットボール振興会顧問の手嶋先生が逝去され、葬儀は家族葬で7月初旬に執り行われました。

先生は1926年5月に愛媛県西条市でお生まれになり、地元の三島中学から東京高等体育学校（後の教育大の一部）へ進学されましたが、途中で軍隊に召集され終戦によって復学、卒業されました。

80歳を過ぎて、股関節への人工関節にする手術を行い、術後毎日のリハビリに努力され、健康の維持に努力されていましたが、このほど93歳にて天寿を全うされました。

昨年末には、ご自宅のある東武東上線常盤台駅前のレストランで、ご家族を交えて、東京都立蔵前工業高等学校（以後、蔵前工業高校）のバスケットボール部OB達20人と楽しいひと時を過ごし、2019年に再会を約し散会した所でした。

先生とは、1958年、先生が蔵前工業高校で教職におられ、我々が入学後バスケット部に入部したときの顧問として出会いました。先生も若く、教員チームや日本協会、高体連の要職をお勤めの傍ら、我らバスケットボール部をご指導されていました。従来は180cmの大きい選手を入学式の折、先生自らがスカウトし、リバウンド、ディフェンス等を強化しながら、出ると負けのチームを、2～3回戦前後のチームに仕上げられていました。

同期で入学した我々は中学時代に各ポジションでプレーした7～8人がそろい、先生も3年後のインターハイに向けた構想を持たれたようです。入部後はハードな練習が続き3年間で三が日以外休みもなく練習に明け暮れましたが、先生のご指導で楽しい毎日であったことを思い出します。蔵前工業高校入学の生徒は母子家庭や貧しい家庭が多く、2～3カ月に一回は、腹すかしの部員に井物をおごって頂き感謝でした。

蔵前工業高校には2年生の後半迄体育館もなく、赤土のグラウンドで、そして毎日学校から隅田川の両国橋を過ぎ新大橋から対岸へ渡りUターンし蔵前橋を渡ってのロードワークで鍛えられました。

幸いにして、1958年組は、先生のご指導よろしく、第13回インターハイ（福井）に出場、ダークホースとして優勝候補の静岡を順々決勝で破り、準決勝にコマを進めました。準決勝は怪我人（昌谷・深尾）もあり主力を温存して3位決定戦にかけたとのこと。3位決定戦では一度も勝ったことのない東京の強豪畑先生率いる武蔵高校に勝利し、都立高校としては都立墨田工業（第2回大会準優勝）以来全国三位となりました。先生も万感の思いであったことでしょう。

1962年に千葉（館山）に合宿所が出来、先生の人脈で安房高校の体育館をお借りして合同合宿を続ける事が、チーム力アップにつながりました。それ以降蔵前工業高校は、インターハイ、関東大会、日韓交流戦等、華々しい戦績を残し優秀な選手を輩出いたしました。

先生は、日本協会理事・全国高体連副部長・東京都高体連バスケットボール副部長の要職を歴任しました。更に、高体連の自主運営を図り、審判部を強化するため、インターハイ前の数日、審判講習会を行い、教員の意識改革も図られました。

先生は、1966年、日本女子体育大学教授に転出され、その後は二階堂高校の校長も兼務し大学・高校とバスケットボールを指導され、先生の母校筑波大から大門先生を助手として招き、女子体育大学の改革を志しました。

最初は、大学、特に女子大学にかかわるバスケットボールの審判部の組織化でした。故日比野国際審判・今井審判委員長・秋里審判にご協力頂き大学女子の審判部が確立されました。今や多くの女子A級審判がWリーグや国際大会で活躍されているのも先生の足跡です。

その他、女子体育大学で、サッカー、ラグビー等を正式科目へと望みましたが、企画が早すぎて体制は整いませんでした。のちに女子サッカーがワールドカップで優勝したことから、早すぎた企画であったことと思いますが、先生の企画の大きさが見え隠れします。

振興会でも常に改革的なご意見と明日のバスケットボールを熱く語る先生でした。

手嶋先生、安らかに眠りください。

合掌

[理事・歴史部部長]

手嶋 昇 先生との思い出

小澤 正博

手嶋先生が振興会へ入られたのは、平成元年の発足時でしたが、私は現役審判時代から手嶋先生には大変お世話になりました。それは手嶋先生が世田谷区烏山の日本女子体育大学（以降日女体大）の助教授として勤務されていた頃からです。

手嶋先生が蔵前工業高校の先生をされていた頃、審判もされ、高体連大会の笛を吹いたり、1964東京オリンピックでも笛を吹かれていたからかも知れませんが、日女体大の学生に審判の勉強を指導し、同大学に女子審判部を創設されました。

現代では女性の審判も多くなり大変良いことだと思いますが、当時女性審判は全体の1～2%と少なく、女性審判を育てるこの方策に朝日新聞が大きな記事を掲載していました。手嶋先生はこの頃から女性審判の必要性を先見され、他に率先しての女子審判部発足だったのではないかと思います。

その後、日女体大審判部の中に、テーブルオフィシャル委員会が設置され、審判と共にテーブルオフィシャル要員の育成にも取り組まれ、オールジャパンや日本リーグのテーブルオフィシャルを数多く担当していただきました。私も年に数回開催されるテーブルオフィシャル講習会に講師として幾度となく足を運ばせていただきました。

手嶋先生が関東大学女子学連の役員をされていたことにより、関東大学女子の試合はかなりの頻度で日女体大体育館にて開催されていました。

私も数えきれないほど日女体大体育館へ審判に出かけましたが、その度に大変な優遇を受け審判が終わった後など、シャワーどころかお風呂やサウナまで頂いたこともありました。

一方で、手嶋先生は非常に研究熱心な方でもありました。スポーツに怪我はつきものですが、手嶋先生は怪我を予防するには「どのようなことが役に立つか」など地道な研究をされていたようです。チタンテープやゲルマニウムの活用など、筋肉の疲労回復に役立つ物質の研究も多岐に亘っていました。

毎年開催している振興会秋季講演会の講師をお願いして、私たちの健康法などについて、これらの研究成果を踏まえて講演頂いたこともあります。(2001年発行プラザ16号参照)

手嶋先生は大学の教授を経験されただけあって、著書も多く昭和35年(1960)に出版した「バスケットボールの練習法」に始まり平成7年(1995)出版の「自己動・手・健康法」まで実に21回に及びます。前半はバスケットボール関連著書でしたが、後半は殆どがスポーツと健康に関する著書でその研究熱心さが表れています。

筆してきましたように、手嶋先生がバスケットボール界に残された功績は派手ではありませんでしたが、地道に着々と改革を勧められた事柄には多大なものがあります。

大変健康だった手嶋先生も80歳を過ぎたころから少しずつ健康を損ねられ、入退院を余儀なくされていましたが、昨今力尽きて黄泉へ旅立たれました。ご冥福をお祈りいたします。

合掌
[副会長]

事務局だより

[総務部]

◇ 会費納入のお願い

振興会は会員の皆さんの会費によって運営されております。
早めの納入に、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

振込み口座番号

ゆうちょ銀行

00100-3-316035

NPO法人日本バスケットボール振興会

三菱UFJ銀行

神保町支店 普通預金口座 1684743

特定非営利活動法人日本バスケットボール振興会

みずほ銀行

丸の内中央支店 普通預金口座 1004687

特定非営利活動法人日本バスケットボール振興会

◇ 都道府県協会の皆様へ

「バスケットボールプラザ」発行費用一部ご負担をお願いしたところ、協力のお申し出があり、負担金も振り込まれています。ご支援を頂きましてありがとうございます。
新たにご協力を頂けます際には、発行費用の一部ご負担金は、年額 2000 円ですので、ご了承の節には上記取引金融機関にお振り込みをお願い申し上げます。
また、都道府県大会などにおける試合の結果や、イベント報告など告知したい事柄がありましたら、事務局へお知らせください。その際には都道府県の頁を設けて、積極的に掲載させていただきます。

◇ 振興会のメールアドレス変更

振興会は、8月1日より下記のメールアドレスに変更します。
新メールアドレス: contact@jbbs.jp

◇ 振興会事務局の仕事内容

事務局は、新聞社、NHKなどのメディアから問い合わせのあった場合、バスケットボールの選手の情報、歴史的な情報などについて、真摯に対応しています。
残念なことです、亡くなられた方々についての「訃報」などの情報を、日本協会などの団体に伝えることも行っています。

プラザ こぼればなし

- ◇ 男子日本代表は、本文で紹介のように8月12日からの国際強化試合を経て、9月1日から中国でのワールドカップに参戦する。日本のワールドカップ出場は、2006年に時刻開催枠で入って以来13年ぶり、予選を勝ち抜いての出場は21年ぶりである。
7月30日発表の代表候補選手16名には、司令塔の富樫選手が怪我で外されているが、これまでの予選で揃い踏みのなかった八村塁、渡辺雄太、ファジーカス・ニックの3本柱が含まれる。東京オリンピックの前哨戦としても結果が大いに期待できる。
- ◇ 女子日本代表は、5月31日、6月2日と三井不動産カップ（水戸大会）でベルギーと対戦し、2連勝した。ベルギーとは女子ワールドカップ2018予選リーグでも対戦し、77-75で勝利している。決勝トーナメントで、ベルギーは4位だったが、日本は中国との8位決定戦に敗れて9位となった。ちなみに、女子ワールドカップ2018の上位10チームは、1位USA、2位オーストラリア、3位スペイン、4位ベルギー、5位フランス、6位中国、7位カナダ、8位ナイジェリア、9位日本、10位トルコである。
女子世界ランクは、女子ワールドカップ2018終了後の10月1日に発表され、1位USA、2位スペイン、3位オーストラリア、4位フランス、5位カナダ、6位トルコ、7位中国、8位セルビア、9位ブラジル、10位日本となった。ベルギーは16位だが、ワールドカップの成績で大幅にランクアップの上昇気流に乗ったチームである。女子日本代表の大幅な飛躍も期待したい。
- ◇ 2020年は、「大日本バスケットボール協会」が創立された1930年から90周年の記念の年であり、男女ともに日本代表チームが東京オリンピックへ出場する日本のバスケットの歴史的な記念の年になる。
- ◇ モルテンNEWボールが2019年～2020年トップリーグ（Bリーグ、Wリーグ）の公式戦で使用される予定である。新しい性能を持つこのボールが試合にもたらす影響を注目したい。
これまでの公式戦では、審判部より新品ボールの使用を控えるように要請があったが、性能向上を図ったのであれば新品のボールが使われるようになるであろう。

N P O 法人
日本バスケットボール振興会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-40
豊明ビル 301号室
電話／F A X (03) 3219-9311
メール contact@jbbs.jp
